平成２９年度　課題改善に関する実践例

甲府昭和高等学校　国語科**（1）課題の内容**

**学習意欲の向上につながる評価の在り方～生徒の自己評価による自立的学習の取り組み**

テーマ設定の理由 生徒による自己評価を授業に導入することによって、学力が伸びると仮定した。なぜならば、自己や他者等を評価するには、生徒が自分自身に対して客観性を持つ必要があるからである。また、自ら問題を見つけ、解決法を探る内省活動を通して、自分の学習に生徒自身が責任を持つことや自律的学習の習慣につながるのではないかと考えた。さらに、学習者にとっては、自らの学習態度を客観的に観察することによって、「認知」を導く「気づき」を促され、次なる学習意欲に繋がるのではないかと考えたため。

**（2）課題改善に向けた具体的な取組**

取り組み内容 "

科目　国語表現

対象　3年1～3組（選択）　14名

実施日　平成29年5月17日（水曜）

単元　自己PRと面接（志望動機をまとめよう）

授業内容

志望理由を400字程度にまとめ、1分程度でスピーチをする。

①発表に対して、前回の発表（自己PRのスピーチ)の課題点を踏まえて、新たに発表の目標を各自が設定する。

②発表後、その目標が達成できたかを各自が3段階（ABC）で自己評価する。

自己評価例

①落ち着いて、はっきり声を出して発表する。　②落ち着いて話すことが出来た。もう少し声を張れば良かった。

①早口にならずに、ゆっくりはっきり話す。　②最初は少し早口だったけれど途中からはゆっくり話せた。

①抑揚をつける。　②目標は達成できた。抑揚を意識しながら話すことが出来た。

①落ち着いて、言葉を詰まらせないようにする。　②できるだけ文と文の間に時間を空けたりして工夫したが、少し詰まった。

①なるべく顔を上げて発表する。　②顔を上げて話すことが出来たが、顔を上げることに意識がいってしまい、ペースが速くなってしまった。

**（3）取り組みの成果とその要因（4）取り組みの中で感じられた課題と考えられる要因**

学習目標（到達度目標）自体を教師が設定してしまうと、学び手が追随、すなわち教師の指示に従って、決められたことを忠実に行うことが要求される「追随達成」の傾向になってしまう。 これを更にランクｕｐさせた学び手が選択可能性を与えられ、自分なりの学習計画を作り上げ、それを遂行していくという意味で能動性をもって目標を設定する「独立達成」の学習形態を目標にした。これらの活動は、生徒の主体的な学びの支援の手立てになったと思うが、これについては、自分の目標が達成されているという評価を自分で値踏みすることに対して、教師がどのように評価するのかという問題点がある。どのように、教師が「生徒の自己評価に関わっていくのか」ということが上手に組み合わせられていくことにより、生徒自身の評価能力も向上し、目標達成が階段のように積み上げられていき、生徒たちの主体的個別の学びが実現していくと考える。

**（5）（4）で感じられた課題に向けての改善策（案）**

評価するにはある程度の基準が必要になるであろう。今回は、三段階という大雑把な区分けであったが、数値化された基準が必要となるであろう。例えば以下のような達成率を数字化すると自己評価が分かりやすくなるかも知れない。

目標の実現状況判断の基準評定

「十分満足できるもののうち、特に程度が高い」状況と判断されるもの９０％以上　５

「十分満足できる」状況と判断されるもの８０％以上９０％未満　４

「おおむね満足できる」状況と判断されるもの４０％以上８０％未満　３

「努力を要する」状況と判断されるもの４０％以上２０％未満　２

「一層努力を要する」状況と判断されるもの２０％未満　１

また、教師の介入の仕方であるが、学習の過程での評価は、難しく、発表自体を観察する必要がある。例えば、グループでの話し合いの様子を観察して、発言の様子をとらえるなどである。しかし、そうした方法で生徒全員を評価することは難しい。生徒全員評価するには、最後にまとめて、ペーパーでの方法になる場合が多くなり、その都度の評価では、自己の評価が他者に聞かれてしまい、個人情報の観点からも望ましくない。